

ほなひ歴史通信

第117号

2025(令和7).12.1

戦後八〇年を迎える年に

「軍事教練の中で、校庭でほふく前進を行っていたところ、ぬかるみがあったので皆それを避けて進んでいた。そうすると、「貴様ら、戦場でも同じことができると思うのか」と将校から怒鳴り声が飛んできた」。袋田方面からの軍事教練の帰り道、愛宕町付近を通ると、バリバリとすごい音とともに米軍機の空襲が始まった。皆慌てて近くの民家の軒下などに身をひそめた」。

これらは、私が幼い頃より、祖父からたびたび聞いていた話である。何度も同じ話を聞いていたためか、時には煩わしく思ってしまうこともあったが、自分の孫に話しておきたいという思いがあるのだろうと幼心に感じていた。その祖父も、すでに旅立ってしまい、今ではその話を聞くことができなくなってしまった。平成生まれの私にとって、戦争時代は生まれる前の遠い昔のできごとであったが、その一方で、身近にいた祖父が生きてきた時代でもあった。

今年、戦後八〇年を迎える年であり、各地で戦争時代を振り返る企画が行われた。大子町においても、九月二十七日の第二回ふるさと歴史講座で、「空襲の時代と大子」という講座を開催した。私自身が講師を務め、私の祖父も経験した大子空襲を中心に、空襲に向かっていく時代の大子町の様相を取り上げた。講座には、

大子空襲について親や祖父母から話を聞いていた方、実際に体験された方などが多数参加しており、改めて戦争時代に対する大子の人々の関心の高さを感じた。また、講座の中で、大子空襲を実際に経験した大金一雄氏に当時の体験をお話しいただいた。大金氏は私の祖父同様、大子農林学校の生徒として空襲を経験しており、「空襲後に周囲に落ちていた葉莢を拾いにいった人もいた」と私の祖父が語ってくれた話と重なる体験談も聞くことができた。改めて、戦争時代を実際に経験された方の言葉の重みを感じることなった。

戦後八〇年を迎える中で、戦争時代を経験された方の多くが九〇歳を越える年齢となってきた。当時の体験を語ることでできる人々もごくわずかとなっている。今回の講座では、戦争時代のできごとを家族や周囲から身近に聞いている方々が多く参加していたが、今後を担う若い人たちにとっては、それが当たり前ではなく、歴史の教科書を通じて知るような、遠い過去の時代になつてしまっているのである。

私が勤務する水戸は、昭和二〇年（一九四五）八月二日に大規模空襲を受け、中心市街地の大部分を焼失するとともに、多くの人的被害を生じている。そのため、当時の記録を残そうとする活動が盛んで、水戸空襲前後の体験や戦時下の生活の記録をまとめた『水戸空襲戦災誌』が編まれ、戦争時代の真相を知る貴重な手がかりとなっている。一方、大子町域では、戦争時代の暮らしや大子空襲の体験をまとめた記録はほとんど残っていない。そのため、当時の様子を感じ取ることは、戦争経験者の減少とともに、年々難しくなっている。

私たちが当たり前のように触れてきた、身近な人々の戦争体験をどのように伝えていくべきなのか。祖父と過ごした時間を思い返しながらか、考える一年であった。

（藤井達也）

懐かしき昭和の太子（五）



○ホテル奥久慈（昭和四十一年頃）

ホテル奥久慈は、全国共済農業協同組合連合会の保養施設として、昭和四十一年（一九六六）七月、太子町池田に開業した。客室数は四十七で、最大約二百人を収容することができた。奥久慈グランドホテルと並んで太子温泉を代表するホテルだった。最盛期の昭和五十四年には、宿泊客だけで三万人を超え、日帰り客や結婚式場利用者を合わせると、約四万八千人に達した。しかし、バブル崩壊後の不況等により、平成十七年（二〇〇五）には、宿泊客が一万八千人にまで減少し、日帰り客や結婚式場利用者を合わせても三万人を下回った。利用者数の低迷に加えて、建物の老朽化も重なり、平成十九年一月に閉館した。その後、伊東園ホテルグループを運営する株式会社スタデイが建物を取得し、客室を増築の上、ホテル奥久慈館を開業し、現在に至る。（大金祐介）

太子町歴史資料調査研究会では、明治・大正・昭和期の写真や絵葉書を探しております。お見せいただける方は、太子町教育委員会事務局生涯学習担当までご連絡ください。

編集 太子町歴史資料調査研究会

編集人 藤井 達也（太子町歴史資料調査研究員）

大金 祐介（太子町歴史資料調査研究員）

小松崎 研（太子町歴史資料調査研究員）

山崎 仙一（太子町教育委員会事務局）

大金真理子（太子町教育委員会事務局）

発行 太子町教育委員会

久慈郡太子町大字池田二六六九番地

☎ 0295（72）1148

発行日 二〇二五年（令和七）十二月一日